『賀茂保憲女集』の長歌の特質

―女性が長歌を詠む時―

渦巻　恵

1　保憲女とその集について

賀茂保憲女は、陰陽家、賀茂保憲（延喜一七917年誕生、貞元二977年没）を父とし、漢文の才に秀でた慶滋保胤を叔父に持つ。同じく叔父の保章も文章博士。その息子、為政も文章博士を歴任し、『拾遺集』以下の勅撰集に四首が入集する歌人である。保章の娘が歌人、相模の母。また、保憲女の長兄、光栄は、保憲の弟子の安倍晴明とともに『栄花物語』にも、「晴明光栄などは、いと神さびたりし者どもにて験ことなりし人々なり」と讃えられ、活躍の程が知られる。

保憲女についての詳細は明らかでない。勅撰集の『風雅集』に二首、『新続古今集』に一首が保憲女の歌として入集。よみ人しらず歌として、『拾遺集』、『新古今集』に各一首が採られている。集は、長大な序文と題詠歌を中心とし、私的な歌はわずかであるために、実際の暮らしぶりや具体的な交友関係を窺い知ることはできない。道綱母とほぼ同年代、清少納言よりは少し年上かと思われるが、歌会、歌合に出詠するということもなく、名の通った人と贈答をした様子もない。

序文末尾部分には次のようにある（以下、集の本文は、『賀茂保憲女集新注[1]』を用い、その他は『新編国歌大観』『新編日本古典文学全集』に拠り、適宜表記を改めた）。

此の歌は、天の帝の御時に、もがさといふもの起こりて病みける中に、賀茂氏なる女、よろづの人に劣れりけり。さる中に、ただもがさをなむすぐれて病みける。かさのみにもあらず、多くの病をぞしけると、からうじてこの歌よりなんよみがへりける……題も知らする人もなし。ただ詠まるる時面白きにすれば、冬も桜心の内には乱る。夏の日にも心の内には雪かきくらし降りて、消えまがひなどすれば、定まることなくて、書き集むる手も定めたらず、端に書くべきことを奥に書き、奥に書くべきことは端に書き、定まることなし。もがさの盛りに目をさへ病みければ、枕上に面白き紅葉を人の置いたりければ、思ひ余りて、

　　曇りつつ涙しぐるる我が目にも猶もみぢ葉は赤く見えけり

正月の頃ほひ、思ひ余りては、長歌もあるべし。

ここから、集が保憲女自身によって病中に編まれたこと、一

気に詠まれた題詠歌を連ねたこと、集の完成後にさらに長歌を詠み足したこと、自分の不幸をユーモラスに語る文才を持つことなどがわかる。

さて、女集が、先行する曽祢好忠の百首歌の形式に倣い、表現の影響を強く受けているものであることは夙に論じられている。[2] たとえば、序文においても、

蓬の門に閉ぢられて、出で仕ふることもなき、我が身ひとつには憂けれども……朝に通ひし玉のとぼそも、夕べには八重葎に埋もれて（好忠百首序文）

はかなき八重葎に閉ぢられて、日の光だにまれなりと言へども（女集序文）

雲に鳴く鶴も、つひにむなしく、溝に這ふ虫も、心の行方は隔てなしと思ひなせば、なにはなるあしきもよきも同じ事、好くも好かぬもことならず、名をよしただと付けてけれど、いづこぞわが身、人と等しきとぞや。（好忠百首序文）

はかない鳥といへど、生まるるよりかひあるは、巣立つこと久しからず。はかない虫といへど、時につけて声を唱へ身を変へぬなし。かかれば、鳥虫に劣り、木には及ぶべからず。草にだに等しからず。いはんや人には並ばず……賀茂氏なる女、よろづの人に劣れりけり。（女集序文）

などの表現の摂取が見出される。

女集の成立時期については、序文にある「もがさ」の流行と、集の末尾歌群に父、保憲が亡くなった後に詠まれたと思われる歌があることから、正暦四993年または長徳四998年かと推測されている。[3]

この頃は、「あめつちの歌」や「双六盤の歌」（源順集）、物名の歌ばかりを集めた『藤六集』などに見られるような遊戯的な形式や和歌が流行し、表現技法の競い合いがみられる時期であった。いっぽう、和歌を卑官を嘆く沈淪訴嘆の具とする傾向も現われ、『拾遺集』には源順や大中臣能宣の沈淪の長歌が入集している。和歌において不遇を嘆く詠みぶりは、すでに藤岡忠美が詳細に論じているが、[4] 例えば貞元二977年、三条左大臣が主催し、藤原頼忠邸で開催された『前栽歌合』の序においても、好忠は、

ゆかぬ心を雲の上まで通はし、数ならぬ身をあめのうちに尽くしつつ、過ぎにし夏のあせもよに、しるせる言葉をこなれど、知るも知らぬもみな人の名をよしただとまうすをたのみて奉るべしと侍るなるべし。

と「数ならぬ身」を嘆き、謙辞を記す。

こうした風潮の中で好忠によって詠み出された百首歌という形式は、新しい表現方法を模索し、沈淪意識に共感する歌人たちの間に流行したとみられ、応和する百首が生まれることとなった。追随する百首歌の序文には、次のようにある。

源順、これを見て返ししたりとなむ（順百首詞書）

これは、世の中に曽祢好忠といふ人の詠めるももちの歌の返し……又あるふんやわらはあざな聖叔といふ人、同じももちの歌を同じ心に詠み続け、おほみかきの衛士しづのをだまきまでなん、あはれに思はせたりける。これを又ある山伏苔の衣に身をやつし、松のもとに老いをおくる心に

も、さすがにもののあはれ忘れがたく、世の中のはかなきありさまも、これにつけていはまほしければ（恵慶百首序文）

女性である保憲女が、男性歌人の沈淪意識に同調し、その形式を取り入れたのは、なぜであろうか。不遇を嘆き訴えるべく百首の歌を連ねるエネルギーが、家住みの女性にどうして生まれたのか。

おそらく、学問の家に生まれながらその才を認められることなく、ひどいものがさを患い、無名なまま生涯を終えるかもしれないという悲しみや焦りがあったためであろう。自己の存在を何らかの形で残したいというエネルギーが、百首歌という新しい枠組みに挑戦させ、さらに新奇な好忠の表現が彼女を魅惑したのではないか。

序文には、人がみな平等であることが、くり返し綴られる。

泥の中に生ふるを、はるかにその蓮卑しからず。谷の底に匂ふからにその蓮卑しからず。宮の内の花といへども、咲くことは隔てなし。

人はみな同じゆかりなり。されば、高き卑しきなぞは、鳥にこそあれ、いづれか高き卑しきあらむ。

そして、不遇な自分が誰からも相手にされないことを自覚しながら、それでも集を編むのだと、その意思を述べる。

明け暮れ見れば、水の泡にだに劣れりけり。流れての世に人に笑はれぬべければ、なほ雁の涙に落とし果ててむと思ふものから、なほ書き集めてけり。春夏秋冬、四季なり。

さて、保憲女はいったん集を成した後に「思ひ余りては長歌もあるべし」として長歌を集の末尾歌群に加える。好忠百首には長歌はないが、好忠が百首から十年ほど後に詠んだ三百六十首歌には長歌が付されている。一部音律が乱れるので長歌でなく序文と考えることもできるような、破調の長歌である。女集の長歌は、やはり好忠の長歌に倣うものであろう。

では、保憲女はなぜ先行百首歌にない長歌をあえて詠み加えたのであろうか。また、その長歌にはどのような思いが込められているのだろうか。

2　集の長歌

平安時代の長歌についてはすでにさまざま論じられている。久保木哲夫「平安朝における長歌の意味」には、長歌が「一時代前の歌として、いわば口語でなく文語の意識で、背広でなく羽織袴の意識で受けとられていたのではないか」とある。[5] すなわち、平安時代の長歌は、身近な形式でない、あらたまった意識、緊張感をもって詠まれたものであり、三十一文字では詠み切れない切実な訴えを表現する形式であったのだ。

曽田文雄は、長歌を「伝達」と「表現」に分類し、詠む相手がいて、贈るために詠まれた長歌を「伝達」、相手の死後の追悼や、相手に贈るつもりがなく、返事も期待しないで自己の心中を述懐した長歌を「表現」の長歌とする。[6] そして、「長歌なるものが詠まれるに際しては、それらの詠み手は、何らか心中には秘めてはおき難い強い衝動にかられて詠んでいるらしいことが認められるのである」としたうえで、『平中物語』の長歌

に破調が含まれることから、「散文形式がいまだ発達しきっていない時代の産物」と論じる。

平安時代の長歌は、多くは残っていない。『古今集』、『拾遺集』には各五首、『後撰集』には入集していない。他には、摂関期までを見る限りでは、『小町集』、『平中物語』、『伊勢集』、『蜻蛉日記』上巻・中巻、『多武峰少将物語』、『うつほ物語』、『好忠集』、『保憲女集』、『高遠集』、『新拾遺集』（花山院）、『相模集』、『栄花物語』、『住吉物語』に見出せるのみ。

『古今集』の長歌は、巻十九雑体に、よみ人しらず・貫之・忠岑・躬恒・伊勢の五首。貫之と忠岑の歌は、古今選集に際してのもので、羽織袴をつけたようなうやうやしい気持ちで詠まれたものである。

例えば、忠岑歌（一〇〇三番）は、「くれ竹の　世世のふること　なかりせば　いかほのぬまの　いかにして　思ふ心をのばへまし　あはれむかしべ　ありきてふ　人まろこそは　うれしけれ」と、万葉歌人の柿本人麻呂に敬意を表し、「春は霞に　たなびかれ　夏は空蝉　なきくらし　秋は時雨に　袖をかし　冬は霜にぞ　せめらるる」と、春夏秋冬の四季をめぐり、「おいのかずさへ　やよければ　身は卑しくて　年高き　ことの苦しさ」と年をいたずらに重ねることを嘆きながら、「君が八千代を　わかえつつ見む」と帝を寿ぐ。嘆老や謙辞に加え、祝意を盛り込んでいる。

『拾遺集』の長歌は、巻九雑下に、人麻呂・順・能宣・よみ人しらず・兼家の五首が入集。順の歌（五七一番、応和元961年作。能宣の返歌あり）は、詞書に「身の沈みけることを嘆きて」とあり、卑官の身を嘆く内容である。

「夏はみぎはに　燃えわたる　螢を袖に　拾ひつつ　冬は花かと　見えまがひ　このもかのもに　降りつもる　雪を袂に　集めつつ」と、夏と冬を対比させて、むなしく年月のたつことを述べ、「身のうきにのみ　ありければ　ここもかしこも　あしねはふ　下にのみこそ　沈みけれ」と思いを述べる際に「沢水に鳴く鶴」に自らの鳴き声を重ね、「舟のわれをし　きみしらば　あはれいまだに　沈めじと　あまのつりなは　うちはへて　ひくとしきかば　物は思はじ」と、漂う舟に身を重ねて物思いを詠む。

好忠の三百六十首歌には、四季の部の冒頭にそれぞれ長歌が置かれる。

「年の日かずを　数へつつ　心をば　過ぐす月日に　たとへつつ」と過ぎる年月を数え、「花ちる　春のあした　この葉の落つる　秋のゆふべ　月のあきらけき　夏の夜　風のさびしき　冬の暁までに」と、四季と時間を結びながら、鳥の鳴く音に心を寄せて嘆くことが詠まれている。この部分は、『枕草子』に与えた影響が指摘されているが[7]、前述のように、ところどころに歌の韻律を外れた破調が見られる点が勅撰入集歌と異なるところではある。

このように、男性の長歌は相手に自身の卑官、不遇を訴える、いわゆる「伝達」を目的としたものであることがわかる。

ならば、女性はどのような折に、何のために長歌を詠んだのだろうか。保憲女の長歌を検討する前に、女性の長歌についてまとめておく。

まず、女性の長歌として、古い例では、『小町集』と、伊勢の長歌がある。

『小町集』の長歌（六八番）は、『小大君集』に混入している歌で、詞書には「あしたづの雲井のなかにまじりなば、などいひてうせたる人のあはれなるころ」とあり、「うき雲の　うける我が身は」と身を嘆きつつ、「春の日の　花のにほひも　夏の日の　木の下かげも　秋の夜の　月のひかりも　冬のよの時雨の音も」と、春夏秋冬を、さらに昼と夜で対比させて、「瀬にゐるたづの　島わたり　浦こぐ舟の　ぬれわたり」と鶴や舟を見ながら亡き人を思い、悲しみに暮れることを嘆く。

伊勢の長歌は、『古今集』雑体に入集する一〇〇六番歌である。やはりこれも、仕えた温子の死を嘆く哀傷歌である。「沖つ波　あれのみまさる　宮のうちは　年へてすみし　伊勢のあまも」と、自分の名を挙げ、「舟流したる　心地して」と頼れる人を亡くした悲しみを表し、「空をまねかば　初雁の　なき渡りつつ　よそにこそ見め」と初雁を見ては涙に暮れることを詠む。

『私家集大成　伊勢Ⅱ』（群書類従本系島田良二蔵）には、先の長歌以外に連続して二首の長歌が見出せる。五二〇番は、「故中宮うせさせ給へる時、とをたうみのないしけふをこせたりける返事したりける」と詞書にあり、蝉・虫・千鳥を挙げて、悲しみを表す。五二一番では、詞書には「いかなるをりにかありけむ」と、直接的な動機は書かれていないものの、「わが身は泡と　浮かびつつ……あるかなきかに　わびをれば　あひかたらはぬ　鳥だにも　人のあはれは　しるものを　よろづもつらき　はま千鳥　跡ふみやれば　山びこの　こたふばかりを　わざにして　心とはねば　こぐ舟の　ほにあげてこそ　うらみられけれ」と鳥や舟に託して、我が身を嘆く。

次いで、『蜻蛉日記』には長歌が三首ある。上巻の長歌は道綱母から夫の兼家へ宛てた歌と、夫からの返しの歌である。道綱母歌には、「わが身をうみと　たたへども　みるめもよせぬ　みつの浦は　かひもあらじと　知りながら　命あらばと　頼めこし　ことばかりこそ　白波の　たちもよりこば　とはまほしけれ」と、不誠実な夫に対しての恨みが詠まれている。

中巻の長歌は、安和の変により源高明が左遷され、失意に沈んで尼になった愛宮への同情から詠まれたもの。親交があったわけではなく、贈るつもりはなかったものの、侍女に勧められて、名前を伏せ、多武峰よりとして、愛宮の兄の高光の名で贈った長歌である。歌が詠まれたのは、六月末頃だが、「春のする」「鶯は　かぎりの声を　振りたてて」「よをう月にも　なりしかば」「たたえずぞうるふ　さ月ゆる」と時の経過につれ、「よつにわかるる　むら鳥の　おのがちりぢり　巣ばなれて　わづかにとまる　巣守りにも　なにかはかひの　あるべきと　くだけてものを　思ふらん……舟を流して　いかばかり　うらさびしかる　世の中を　ながめかるらん」と、深い同情心を鳥や舟に寄せて詠む。

伊藤博「『蜻蛉日記』愛宮への長歌」[8]には、「一種の「手習」をしたためたかのような印象」とあり、男性長歌に見られるような伝達意識は薄いが、思い余って相手に贈った長歌のようにも思われる。

『多武峰物語』には、世を捨てた高光に宛てた、この姫君（高光の妻）の長歌と、高光の返歌がある。姫君の長歌には、

「君やうゑし　我やおほしし　なでしこの　ふたばみつばに　生ひたるを　風にあてじと　思ひつつ　花の盛りに　なるまでに　いかでおほさむと　思へども　露の命や　あへざらむ……こと語らはん　ほととぎす　きてもなかなん」と、夫が子を置いて出家した嘆きが時鳥とともに詠まれる。

次に、『うつほ物語』菊の宴巻には、母君（実忠妻）が、あて宮に執心の夫に宛てた長歌がある。続くあて宮巻には実忠の長歌があり、『新編日本古典文学全集』頭注は、実忠妻の長歌と響き合うことを指摘している。母君歌には、「をしの子どもも　並びゐて　うきもつらきも　もろともに　淵にも瀬にも　おくれじと　契りしものを……月日のゆくも　しらぬまは　二葉におひし　なでしこを　くる朝ごとに　かきなでて　親をこひつつ……黄なる泉に　おりたちて　いさごのなみを　うちそむき　悲しき岸に　つきにけり……むばたまの　衣の下に　伏しわたり……わが子のひとり　ゆくみちに　枝なる雪の　消ゆるまも　おくれんとやは　思ほえし」と、夫への恨み、子の真砂子君を失った悲しみが、鴛鴦の子・なでしこ・衣の下などという語を伴って詠まれている。

女性の詠んだ長歌は少なく、家集と物語の歌を同列に論じることは慎重であるべきだが、嘆きの声を鳥の鳴き声に重ねたり、不安な身の上を漂う舟に重ねたり、と表現に類似性が認められるうえに、共通するのは、いずれも女性のほうから相手に向けて長歌が贈られていると言うことである。それは、長歌が思いつめた特殊な環境のもとに詠まれるべき形式であったからと言えよう。

益田勝実「かなぶみに型がなかった頃―『紫式部日記』作者の表現の模索―」[9]は、かなぶみの草創期に仮名序を書いた貫之や、女性でありながら長編の物語や日記作成に挑んだ紫式部が、伝統的な文章の形がないまま「ひらがな」を用いた書き方を模索しながら文を綴ったであろうことを指摘し、また、『枕草子』が、さまざまな漢詩文の表現形態を集めた「文集」にならう、さまざまな文章の型を集めて成り立つことを論じた。

長歌という古めかしい形態の歌が、『古今集』や『拾遺集』など晴れの勅撰集に入集する中、女性たちもまた自分の切羽詰まった思いのたけを、長々と句を重ねることで表現しようとしたのではないだろうか。

『保憲女集』は、序文、百首形式の和歌群、贈答歌に加え、長歌を含む。まさしく「文集」と言えよう。

3　『栄花物語』の長歌との類似

さて、保憲女の長歌の内容を見ていくことにする。なお、全文は補足資料として後に掲出した。

まずは、逃れられない運命の不条理として、たとえば鳥が卵で産まれても、殻を破ることなく腐ってしまったり、孵ってもつらい思いをするばかりであることを嘆く。同じ親の元に生まれても出世をするものがいる一方で、泣いてばかりで、「大沢の池」ではないが、「生けるかひなし」と生きていても甲斐が

ないことを述べ、呼子鳥ぐらいしか相手をするもののいない自身をあわれみながら、森の下陰に埋もれていて、「高き卑しき」がないはずなのに、無常の世が不平等であることを恨み涙を流すばかりだと詠ずる。

わが身の不遇を嘆く具として長歌を詠んでいる点は、先にあげた他の長歌と同様である。また「鳴く鳥」「巣立つ鳥」が重要なタームとして用いられる点も類似する。その中で注目されるのは、補足資料に挙げたように『栄花物語』岩蔭巻の贈答長歌との表現の重なりである。特に二首め、藤原義子の歌には共通点が多く認められる。

まず「生ひいでんことぞ難かりし」と垣根の草が生えて成長することは難しいといい、「番はぬ鴛鴦は　寂しくて　ふたりの羽の　下にだに　せばくつどひし　鳥の子の　雲の中にぞ　ただよひし　昼はおのおの　飛び別れ　夜は古巣に　帰りつつ　翼を恋ひて　なき侘びし　あまたの声と　聞くばかり」と、つがいでなくなった鴛鴦が寂しくしているうえ、羽の下で大切に育てた子供たちが、おのおの飛びたって、夜になって帰ってきても休める翼がなくなって鳴いているばかりであるとし、「悲しき事は　広沢の　いけるかひなき　身なれども」と、生きていても　広沢の池ではないが甲斐がないといい、「こ高くならん　枝もあらば　そのかげにこそ　かくれめと　思ふ心は　深緑　いくしほとだに　思ほえず　思ひ初めてし　衣手の　色も変らで」と不遇をかこち、「夕の松の　風の音に　悲しきことを　しらべつつ　ねをのみぞなく　群鳥の　群れたる中に　ただひとり　いかなるかたに　飛び行きて　知る人もなくまどふらん」と夕方の風の音に悲しみが増し、群どりの中にひとり飛び惑い「歎きの森の　しげさをぞ　払はんかたも　思ほえぬ」と嘆いて、最後は「ことわりの　涙の川を　流すかな　ましてやそこの　辺りには　いかばかりかは　たたふらん　淵瀬も知らず　歎くなる　心の程を　思ひやる　人の上さへ　歎かるるかな」と終わる。

贈歌のほうは、これほどではないものの、春夏秋冬が詠まれ、季節の鳥が詠まれ、「あま人も　船流したる　年月も　かひなき方は　まさるとも」と舟を流した海人の嘆きが詠まれて、最後は「このかたみなる　思ひあらば　ひとり残さず　うちはぶき　衣のすそに　はぐくめと　身の程知らず　頼むめるかな」と結ばれている。

保憲女との大きな違いは二つ。岩蔭巻の長歌が贈答であることと、子を失った悲しみが詠まれることである。「衣の裾にはぐくみて　塵も据ゑじと　磨きつる　玉の光の　思はずに消えにしよりは　かきくらす　心の闇に　まどはれて」とあり、「朝の露を　玉と見て　磨きし程に　消えにけり」とあるのは、子の死を悼む表現である。

岩蔭巻の長歌は、一条院の崩御の記事に加えて巻末に置かれているものである。しかし、院を失った悲しみの気持より、取り残されて生きなければならない悲しみに主眼があるようである。贈歌の作者は、左衛門督の北の方とされる。岩蔭巻の寛弘八1011年当時の左衛門督は、藤原頼通。北の方は具平親王女、隆姫。寛弘六年に十五歳（義子より二十歳年下）。具平親王は『栄花物語』では岩蔭巻の直前の初花巻に寛弘七年に亡く

なったとある。『御堂関白記』によると寛弘六年七月二十九日に没している。返しの作者は、藤原 義子（天延二974―天喜元1053閏七月）である。長徳二996年七月二十日に入内。八月九日に女御となる。長保二1000年に従三位、寛弘二年、従二位。万寿三1027年十二月十八日に出家。天喜元年閏七月薨去。享年八十歳。子が生まれず「簾の身もはらみたるかな」と揶揄される。

当時新婚の若い北の方、隆姫と、子のない義子の贈答歌とは到底思われない。

松村博『栄花物語の研究　第三』[10]は、北の方を義子の異腹の姉であり、劣り腹（公季妾）の姉と想定。「かたみにこそは頼みしか」という近しい間柄であるとし、歌に「二人の羽に下にだにせばくつどひし鳥の子の」などとあることから、「義子は入内後一度は懐妊したが、亡くなったために世間に伝わらなかったか」として、「拾遺集所載源順の長歌にも似た歌として捨て難い味はひがないでもないのである。」と評価した。

一方、山中裕・秋山虔・池田尚隆・福長進『新編日本古典文学全集　栄花物語』[11]（小学館一九九五　頭注）は、先の長歌は乳母が、後の長歌は子を亡くした女が詠んだと仮定し、「この詠者名がどこから出たものかは定かではないが、史料批判が不十分なまま載せてしまったことは明らかである。死を悼むという内容もさることながら、その長大さ、当時、比較的珍しい長歌という形式に引かれるところがあったのだろう。……そもそも一条院崩御にかかわる歌なのかを含めて、不明と言わざるをえない。」としている。

柏村周一「『栄花物語』巻九「いはかげ」にみる創作方法」[12]は、史実と異なる創作性と批判性が見られることを指摘している。

『栄花物語』の長歌二首は、後に巻末に付け加えられた可能性が高いのではないだろうか。そして、そこに保憲女の長歌の表現が摂取されているように思われるのである。

保憲女の長歌が流布していた可能性は、『奥義抄』下巻に認められる。和泉式部の「とをづらの馬ならねども君乗れば車もまとに見ゆるものかな」に対し、「とをづらとは十列の馬と詠めるにや。この歌にはよしなくぞ覚ゆる……又賀茂女が長歌にも、うきとをづらに我乗れば比べぞ侘ぶる富士の嶺のなど詠めり。これらはひとへに十列と詠めり」とあるのは、「世の中の　憂きとをつらう　入れつれば　倣へに侘ぶる　葦のねの　煙に誰も　成り果てて」の「とをつら」の部分を引用したものであろう。『奥義抄』成立の頃に、女集が流布していたことがわかる。

どのような経緯で保憲女の長歌の表現が摂取されたのかは不明であるが、保憲女の歌が『拾遺集』に「よみ人知らず」として採られていることから、歌はある程度流布してはいたと考えられる。清少納言、紫式部に影響を与えた可能性もすでに指摘されているところである。[13]保憲女の長歌は、「思い余って」詠まれた沈淪の歌であった。その深い悲しみの表現が、子を失った女性の悲痛を代弁するベースに用いられたとすれば、興味深い。

最後に、紙幅の都合により、簡単に女性の長歌、保憲女の長

歌の特質をまとめておく。

共通　不遇感

相違　哀傷・喪失感・身近な知人への訴嘆・直接的な動機（小町・伊勢・蜻蛉・多武峰・うつほ・栄花・相模・住吉）

⇔

好忠三百六十首歌の長歌の影響を承けた、自己の心中の表現・述懐・相手が不在（保憲女）

長歌を公的、私的と分けて分類すると、男性歌人の長歌は公的な性格が強い。歌人としての腕試しであり、特別な緊張感を持って読まれ、教養を試されるものであったのだろう。述懐性がその特徴で、形式とともにその主題は、堀河百首の俊頼の述懐題の長歌に引き継がれた。

こうした、かしこまった長歌は、教養高い男性が詠むものであって、『源氏物語』では近江の君に対し、

今にても、申し文を取り作りて、びびしう書き出だされよ。長歌などの心ばへあらむを御覧ぜむには、捨てさせたまはじ。（行幸巻）

とからかいの場面に用いられている。

一方、私的な女性の長歌は、余る思いを一首の歌や連作でなく、長歌として詠むもので、死や別離などの直接的な動機によって詠み出されたものであった。それが、平安時代の女性の長歌の特質であり、保憲女の長歌はその点でむしろ異質と言うことができそうである。

保憲女が詠んだ女性による百首歌は、源重之女、和泉式部、相模に継承される。それらには恋の不遇を嘆く主題性が見出され、表現の共通性も顕著であるものの、長大な序や長歌は含まない。そもそも『保憲女集』は、百首歌を目指しながら、詠むうちに歌の数は増え、いったんの完成を見てからさらに増補を重ねるという特殊性を持つ。保憲女の詠作へのエネルギーのほとばしりは、百首の枠組みを越え、長歌を詠むことにまで至ったのであろう。

近年『枕草子』や『源氏物語』への影響も指摘されながら、注目されることの少ない『保憲女集』は、このように特異な性格を持つ家集であることを再確認すべきであろう。

なお、本稿は和歌文学会例会（二〇一五・一一、於　お茶の水女子大学）において口頭発表したものに基づく。さまざまにご教示いただいた先生に感謝申し上げる。

注

（1）拙著『新注和歌文学叢書15　賀茂保憲女集新注』（青簡舎　二〇一五）

（2）三田村雅子「賀茂保憲女集の位相―〈鳥〉の表象・歌から序へ―」（『和歌文学新論』明治書院　一九八二）、竹内はる恵「『賀茂保憲女集』考」（『古典和歌論叢』明治書院　一九八八）など。

（3）岡一男「賀茂保憲女とその作品」（『国文学研究』3号　一九五〇・一一　後に『古典の再評価』有精堂　一九六八所収）、川嶋（藤田）明子「賀茂保憲女研究（一）―輔親をめぐる問題―」（国語国文研究17号　一九六〇・一〇）、「賀茂保憲女研究（四）―家集序文をめぐって―」（国語国文研究27号　一九六四・二）、松平盟子「『賀茂保憲女集』の研究―疱瘡罹病年代と序文について―」（南山国文論集2号　一九七七・一一）、鈴木美恵子「『賀茂保憲女集』に関する覚え書―「もかさ」について―」（金城学院大学大学院文学研究科論集1号　一九九五・三）など。

(4)『平安和歌史論―三代集時代の基調―』(桜楓社　一九六六)
(5)「平安朝における長歌の意味」(『国文学論考』4号　一九六七・一二　後に『折の文学　平安和歌文学論』笠間書院　二〇〇七所収)
(6)「平安時代の長歌」(『論集日本文学・日本語』角川書店　一九七七)
(7)三田村雅子『枕草子　表現の論理』(有精堂出版　一九九五)
(8)『蜻蛉日記』愛宮への長歌」(上村悦子編『王朝日記の新研究』笠間書院　一九九五)
(9)「かなぶみに型がなかった頃―『紫式部日記』作者の表現の模索―」(国語と国文学　一九八四・五)
(10)『栄花物語の研究　第三』(桜楓社　一九六七)
(11)『新編日本古典文学全集　栄花物語』(小学館一九九五　頭注)
(12)『栄花物語』巻九「いはかげ」にみる創作方法」(國學院大学院文学研究科論集　一九九二・三)
(13)久保木寿子『『賀茂保憲女集』四季序の位相―同時代仮名散文との接点から見る―』(白梅学園大学・短期大学紀要44号　二〇〇八)、天野紀代子『「まれの細道」賀茂保憲女と紫式部をつなぐ」(日本文学37号　一九八八・八)、稲田利徳『「稀の細道」考―隠遁者の道への視線―』(解釈　二〇〇九・九・一〇)、植田恭代『『源氏物語』と和歌のことば―桐壺更衣「いのちなりけり」の場合―』(跡見学園女子大学文学部紀要　47号　二〇一二・三)、注1拙著解説など。

補足資料（類似部分に傍線を付す）

保憲女（一九四番）

契りあれば　いかが逃れむ　生まるとも　卵籠め腐ちて　鳥の子の　かへりては身の　憂きことを　親の結べる　心の内に　いつか味わひ　くくむこと　なくなく籠り　ありければ　己が羽々　生ひたちて　隠れし親の　羽衣　皆忘られて　飛び馴らひ　あるは賢く　なる巣子の　賢き鷹と　名をふるひ　あるはかなく　さすらへて　立つと居るとに　思ひつつ　なげきの下を　降り上り　今やはかなき　死にすると　囀る声を　聞く人は、競ひすると　や　思ふらむ　あはれ悲しき　我が身かな　冬なりし時　消えにせば　いと　返しする　風吹きて　惜しむ草木も　ありなまし　人なみならで　人となり　もの思ふことは　おほさはの　いけるかひなしと　思ひつつ　猶ふること　は　不破の関　人よりこそは　越えざらめ　等しくだにも　なるやとて　は　かなく過ぐす　夏冬を　暑し寒しと　言ふほどに　年月のみに　こゆるぎの　いそがぬ我は　つれづれと　葎の下に　遣ひ伏して　かなふ人なみ　蔀山　吹き上げ下ろす　風の音の　朝夕に　悲しきは　かせぎの声に　射る時に　答ふるがごと　聞こゆれば　などしもここに　あるかとぞ　心にかなふ　呼子鳥　呼ぶに従ふ　山彦の　響きばかりを　頼みつつ　稀に掛かれる　萵　簾　涙ばかりの　出で入りに　朽ち果てぬれば　いとどしく　心の内も　見　え果てて　身をはづかしの　森の下　陰に変はらぬ　我が身とや　人や見る　らん　あし繁み　かつはつれなく　なりながら　下騒がるる　我が胸は　安　けくもなし　鳴滝の　落ち積む太布は　多かれど　我が身ひとつに　数なら　ぬと　思ひしかども　世の中の　憂きとを辛う　入れつれば　倣へに侘ぶる　葦のねの　煙に誰も　成り果てて　忌々し忌々しと　言ふほどに　明日ぞ　瀬になる　飛鳥川　ふちの衣に　まつはれて　高き卑しき　なみだ川　水上　速く　なりにけるかな

左衛門督頼通の北の方

数ならぬ　道芝とのみ　歎きつつ　はかなく露の　起き伏しに　あけくれ竹の　生ひ行かん　この世の末に　なりてだに　嬉しきふしや　見ゆるとて　いつしかとこそ　松山の　高き梢に　巣籠れる　まだ木伝はぬ　鶯を　梅の　匂に　誘はせて　東風早く　吹きぬれば　谷の氷も　うちとけて　霞の衣　立ちゐつつ　下枝までにも　うち靡き　岸の藤波　浅からぬ　にほひに通ふ　紫の　雲のたなびく　朝夕に　今も緑の　松にのみ　心をかけて　過す間　に　夏来ぬべしと　聞ゆなる　山郭公　さ夜深く　語らひ渡る　声聞けば　何の心を　思ふとも　いひやらぬまの　菖蒲草　長きためしに　ひきなして　屋端にかかる　ものとのみ　よもぎの宿を　うちはらひ　玉の台と　思ひ　つつ　うつせみの世の　はかなさも　忘れはてては　千歳経む　君が禊を　祈りてぞ　かきながしやる　川瀬にも　かたへ涼しき　風の音に　驚かれて　も　色色の　花の袂の　ゆかしさを　秋深くのみ　頼まれて　紅葉の錦　霧　たたず　夜を長月と　いひおける　久しき事を　菊の花　にほひをそむる　時雨にも　雨のしたふる　かひやあると　はかなく過す　月日にも　心もと　なく　思ふまに　頭の霜の　置けるをも　打払ひつつ　あり経んと　思ひ空　しく　なさじとぞ　衣の裾に　はぐくみて　塵も据ゑじと　磨きつる　玉の　光の　思はずに　消えにしよりは　かきくらす　心の闇に　まどはれて　あ　くべきかたも　涙のみ　つきせぬものと　流れつつ　恋しき影も　とどまら

ず　袖のしがらみ　せきかねて　滝の声だに　惜しまれず　まどひ入りては
　尋ぬれど　死出の山なる　別れ路は　いきて見るべき　かたもなし　あはれ忘れぬ　名残には　日数ばかりを　数ふとて　なき渡るめる　呼子鳥　ほのかに君が　歎くなる　声ばかりにて　山城の　とはに磐瀬の　森過ぎて
　我ばかりのみ　住の江の　まつゆき方も　波かくる　岸のまにまに　忘れ草
　生ひやしげらんと　思ふにも　軒にかかれる　ささがにの　みながら絶えぬ　たよりだに　結ばざりけん　糸弱み　心細さぞ　つきもせぬ　むなしき空を　思侘び　雁の群れゐし　跡見れば　ひとりとこよに　起き伏しも　枕の下に　いけらじと　憂き身を歎く　をしどりの　つがひ離れて　夜もすがら　上毛の霜を　払ひ侘び　氷るつららに　閉ぢられて　来し方知らず　なく声は　夢かとのみぞ　驚きて　消えかへりぬる　魂は　行方も知らず　こがれつつ　釣に年経る　あま人も　船流したる　年月も　かひなき方は　まさるとも　刈る藻かきやり　もとむとも　みるめなぎさに　うつ波の　あとだに見えず　消えなんと　思ひのほかに　津の国の　しばしばかりも　ながらへば　なにはのことも　今はただ　あまたかきつむ　もしほ草　塩の誰を　か　頼むべき　煙絶えせぬ　薫ものの　このかたみなる　思ひあらば　ひとり残さず　うちはぶき　衣のすそに　はぐくめと　身の程知らず　頼むめるかな

（左衛門督の北の方）

水茎に思ふ心を何事もえも書きあへぬ涙なりけり

（内大臣殿の女御殿義子）

水茎の跡を見るにもいとどしく流るるものは涙なりけり

内大臣殿の女御殿義子

いにしへを　思ひ出づれば　雪消えの　垣根の草は　二葉にて　生ひ出でん事ぞ　難かりし　つのぐむ蘆の　はかなくて　枯れ渡りたる　水際に　番はぬ鴛鴦は　寂しくて　ふたりの羽の　下にだに　せばくつどひし　鳥の子の
　雲の中にぞ　ただよひし　昼はおのおの　飛び別れ　夜は古巣に　帰りつつ　翼を恋ひて　なき侘びし　あまたの声と　聞くばかり　悲しき事は　広沢の　いけるかひなき　身なれども　波のたちゐに　つけつつも　かたみにこそは　頼みしか　誰もわが世の　若ければ　行末遠き　小松原　こ高くならん　枝もあらば　そのかげにこそ　かくれめと　思ふ心は　深緑　いくしほとだに　思ほえず　思ひ初めてし　衣手の　色も変らで　年経れば　生ひ出づる竹の　己がよよ　嬉しきふしを　見るごとに　いかなる世にか　かれせんと　思ひけるこそ　はかなけれ　朝の露を　玉と見て　磨きし程に　消えにけり　夕の松の　風の音に　悲しきことを　しらべつつ　ねをのみぞなく　群鳥の　群れたる中に　ただひとり　いかなるかたに　飛び行きて　知る人もなく　まどふらん　とまるたぐひは　おほくして　恋し悲しと　思へども　今はむなしき　大空の　雲ばかりをぞ　かたみには　明暮に見る　月かげの　木の下闇に　まどふめる　歎きの森の　しげさをぞ　払はんかたも　思ほえぬ　見る人ごとに　ことわりの　涙の川を　流すかな　ましてやそこの　辺りには　いかばかりかは　たたふらん　淵瀬も知らず　歎くなる　心の程を　思ひやる　人の上さへ　歎かるるかな

（内大臣殿の女御殿義子）

君もさは昔の人と思はなん我もかたみに頼むべきかな

（うずまき　めぐみ　國學院大學兼任講師）